表通り 裏通り

だ円形のボールに魅せられた女性たち

1月25日に、ことし初めての練習が行われました。パス回しは、練習の基本です

リバティーフィールズは、県内で唯一の女子ラグビーチーム。平成元年に設立され、ことしで二十年目を迎えます。現在メンバーは、二十代から六十代の十五人。練習は、日曜日の午前中に、入間川の河川敷にある東京国際大学ラグビーグラウンド（鯨井）で行っています。

取材当日は、パス回し・スクラム・ラック・リフティングなどの練習を行っていました。練習を始めると、ふだんの表情から一変。真剣なまなざしになり、ボールを必死に追っています。試合などでけがをしないように、体を当てるときの体勢も確認しています。

ボールを持って敵に当たり、味方側にボールを置くラックの練習では、「腰をもっと入れて」など鋭い声が飛びます。右が並木さん

もともと、ラグビー観戦が好きでしたが、しだいに自分でもラグビーがしたくなって始めた方がほとんどです。「ボールをけったり、手で持って自由に走り、相手チームに激しくぶつかったりするところに楽しさがあります。また、個性を生かせるポジションがあって、体の大きさや足の速さに関係なく誰でも楽しめるスポーツです」とキャプテンの並木富士子さん（37歳）。

ラインアウトのボールを取るために行うリフティングは、持ち上げる方と飛ぶ方のタイミングを合わせるのが重要

メンバーの皆さんは、ラグビーのおもしろさを伝えたいと考え、市ラグビー協会が行っている練習会などで、子どもたちにラグビーを教えています。また、その子どもたちの母親の皆さんが行っている、ラグビーに似たタッチフットボールという競技の交流会などにも積極的に参加しています。さらに、月一回都内に出かけ、小学四年生から中学三年生まで約三十人いる関東ブロック女子ユース代表の指導も行っています。

「まだまだ競技人口は少ないですが、多くの皆さんに女子ラグビーを知ってもらいたいと思っています。だ円形のボールに実際に触れることで、ぜひ女性もラグビーを始めてほしいですね。そして、オリンピックの種目として認められるようになればうれしいです」と、並木さんは笑顔で話していました。

昨年11月に江戸川区で行われた第21回女子ラグビー交流大会には、混成チームで出場。横しまのユニホームが、リバティーフィールズの皆さん

まちのできごと

川越市の面積は109.16㎢

109パレット

多くの皆さんでにぎわっただるま市

穏やかに晴れ渡った１月３日に、喜多院でだるま市が開かれました。境内や参道には露店が並び、高さが５㎝から70㎝くらいまでの大きさのだるまが所狭しと置いてあります。色は赤だけでなく白や水色などがあり、形も必勝の鉢巻きをした物や招き猫にだるまが描かれている物などを見かけました。見ているだけでも楽しいだるま市。訪れた方からの「いろいろなだるまがあるね」と珍しそうに話をしている声が聞こえました。

招き猫のおなかに、だるま発見！

宝井さんの辻講釈に耳を傾ける皆さん

笑いを誘った辻講釈

１月８日、蓮馨寺で初呑龍が開催されました。骨とう品を扱う露店が並び、訪れた皆さんでにぎわう境内。辻講釈も行われ、宝井琴梅さんが何色もの声を使い分け、笑いを誘っています。「これを聴かないと、新しい年が始まらないんですよ」と講釈を楽しんでいた皆さん。柔らかな日ざしが、皆さんを優しく包んでいるようでした。

古谷の大空に舞う、手作りたこ

青少年を育てる古谷地区会議主催の「第５回親子凧あげ大会」が、１月17日に古谷東小学校と上江橋緑地を会場に行われました。「最近、たこ揚げをしている子どもを見かけることが少なくなったので、自治会やＰＴＡなど多くの皆さんの協力を得て開催しています。地域全体で子育てを考えていきたいですね」と会長の中野忠次郎さん（72歳・古谷上）。朝、同校の体育館には、約300人の皆さんが集まりました。手作りのたこに好きな絵などを描き、午後からは、大人も子どももたこ揚げを楽しみました。

たこ揚げするのに、ほどよい風が吹いていました

川越かわごえびと 52

高柳晋平さん（82歳・宮下町二丁目）

昨年初雁賞を受賞した高柳さんは、大工の棟りょうとして、文化財に指定されている建物などの修理を手がけ、保存に貢献しています。

祖父・父共に大工を仕事にしていました。十八歳でこの世界に入ったころは、終戦の時期だったので、父と都内の焼け跡で、簡素な住宅の建築に当たっていました。技術を教えてもらうことはなく、父の技を見ながら勉強を重ねました。仕事で辛いときは、自分が未熟だからと思い、いっそうの努力を重ねました。

寺社などの修理には、昔から興味がありました。現在の住宅とは違って金物などを使わない、ていねいな造りに魅力を感じます。しかし、時間と手間が掛かるので、ほんとうに好きでないと取り組むのはなかなか難しいことです。

「木にはそれぞれの特性があり、それを使いこなすのがおもしろいですね」と高柳さん。平成十二年から二年間ほど寺社の修理に当たり、現在は、山車の修理を行っています。これからも、歴史的な建造物の修理を手がけながら、木のぬくもりを感じ続けていきたいと考えています。

宮下町の山車を修理する高柳さん